



対馬丸記念館と、遺族・サポーターを結ぶ、ふれあいの情報誌

対馬丸 通信

発行：(財) 対馬丸記念会
発行人：高良 政勝
編集：対馬丸記念会事務局

Tsushima maru press

平成 18 年 11 月 15 日 発行 第 10 号

特集：第 5 回対馬丸記念館企画展《平成18年 6月23日(水)～8月30日(水)》

沖縄戦後の復興 Part 2 — 私たちはこのようにして立ち上がった — 1945 年～1965 年

戦が終わった

1945年4月～6月、各地で組織的戦闘が終わり、
住民たちは戦場を逃げまどう生活から解放された。
捕虜という身ではあるが、生きのびたのである。



本企画展は、沖縄戦後の復興への胎動期である時代を振り返り、今日の沖縄県民の原点を再確認し、平和の大切さと生きることの尊さを考えて欲しいと企画いたしました。

当時、生活・文化・教育など復興を支えた世代も、現在では、70歳以上です。彼らは対馬丸学童と同世代にあたります。対馬丸記念館の設立理念にあるように、対馬丸犠牲者たちの「夢の未来」に生きた、同世代の若者や、両親・祖父母が戦後の瓦礫の中からのようにして生活を立て直していったかを貴重な現物や写真で紹介いたします。本展をご覧いただき「生きる」ということの力強い思い、平和をよるこぶ心を感じていただければ幸いです。

戦後、沖縄県民が学んだ平和への想いと共に、生活の中から湧き出た創意工夫の数々。物が余り、望めば何でも手に入る現代において、ここに展示されている品々は、「素朴な物」ばかりですが、見方を変える創造性にとんだ心温まる「豊かな物」と言い換えることが出来るのではないのでしょうか。

対馬丸で犠牲になった学童たちも生存していたらきっと沖縄再建の大きな力となったことでしょう。本展でご紹介いたします沖縄県民の歩んできた努力を彼等に捧げたいと思います。

本展は、ぜひ親・子・孫三代でご観覧いただき、現代の我々が忘れがちな物の大切さ、平和の尊さについて語り合い、世代間の対話がはかれることを願います。

本展開催にあたり、展示にご協力いただきました関係各位に深甚なる感謝を申し上げます。

主催 対馬丸記念館 共催 琉球新報社

後援 沖縄県教育委員会 那覇市教育委員会 NKK沖縄放送局

沖縄テレビ放送 琉球朝日放送 琉球放送 沖縄ケーブルテレビ

ネットワーク ラジオ沖縄 エフエム沖縄

資料提供 沖縄県立博物館 つるま市石川歴史民俗資料館 壺屋焼物博物館

諸見民芸館 久手堅憲俊 安次富長昭

企画展の趣旨をご理解いただくため、展示冒頭のご案内をそのまま掲載しました。



慰霊の日から夏休み中の開催で、一定の評価を得ることが出来ました。

3月末のパート1に引き続き開催された、パート2は終戦後の貴重な物品を関係各位のご協力でも数展示することが出来ました。



去る六月二十三日の慰霊の日、天妃小学校五生をオープニング・ゲスト迎え、対馬丸記念館第五回企画展「沖縄戦後の復興 Part 2」私たちはこのようにして立ち上がった」展が開催されました。

この企画展は、前頁のごあいさつや、安次富長昭氏の特別寄稿にもあるように、沖縄戦後復興を改めて対馬丸学童に報告するとともに、贅沢な現代へ警鐘を込めて開催いたしました。



当時の困窮した生活の中から産み出された物品の数々は、観覧者に多くのメッセージを伝えただろうと思います。特に小学生の観覧者が食い入るように魅入っていたのが印象に残りました。

来館者の平均数はあまり変化はありませんでしたが、今後の課題としては広報や県内団体のへる更なる来館促進等、効率の良い誘客活動など、課題も見えた催しでした。



「対馬丸」の学童たちに 捧げる企画展に寄せて

企画展総合プロデューサー

安次富 長昭



対馬丸記念館に來ると、いつも身の引き締まる思いがする。

遺影の中に、泊国民学校時代の同期生が七名、教師お一人祭られている。さらに、図工クラブで共に勉強した同期生の伊波正夫君（当時、沖縄県立第二中学生）が、私の学童疎開地、熊本県日奈久町（現、八代市）の柳屋旅館に送ってきた手紙が階段の踊り場に、彼の遺影と共に展示されている。手紙には、弟の謙一君と

弘君が泊国民学校の学童疎開者と一緒に対馬丸で出航していったが、音信が全くないので尋ねてくれと、くり返し述べている。私が、第二次疎開船で出航したのは昭和十九年（1944年）九月十日だが、その頃には対馬丸が撃沈されたという噂がひろまっていた。この手紙が投函された十一月頃には、厳しい箝口令（他に話すことを禁ずる軍の命令）が敷かれていたものと思われる。したがって、この手紙を書くのに如何に気を使っている

君と弘君は既に他界していることを伝えることはできなかった。彼の頼みは、今も私の胸の中にしまったままである。

ことか。最後は「大東亜戦完遂へと邁進しよう。」と締められているが、悲痛な叫び声が聞こえてくるようである。私が疎開先から引き揚げてきたとき、彼もまた沖縄戦で戦死して二中健児之塔に祭られていたので、対馬丸が撃沈され、謙一

彼の手紙と前後して、日奈久駅の貨物倉庫に対馬丸乗船者の荷物が届いた。私たち高学年生は、それを各学校の疎開地へ回送するために分別作業に駆り出された。その荷物の中に、伊波君の弟たちの多くの名前を見つけたが、薄暗い倉庫に山のように積み上げられた物言わぬ荷物の姿は、私の脳裏に深くきざみこまれて忘れることができない。昭和二十一年（1946年）疎開先から引き揚げてきて、かつて出て行った那覇港に降り立ったとき、あまりにも変わりはた眼前の那覇の姿にただ茫然とするだけであった。「国敗れて山



河あり」と言うが、そこにはもう山河も無くなっていた。沖縄の戦後復興は、無からの出発であり、そして更に、戦後二十七年間の米國統治時代の苦難の歴史とカルチャーショックとの闘いであった。しかし、その体験から沖縄県民の逞しい創造力と生活の知恵が生み出され、今日に見る経済・文化の隆盛の源泉となっている。対馬丸の学童たちも生存していたら、きっと共に沖縄戦後の復興に尽くしてきたものと思うのである。

今年もまた慰霊の夏がやってきた。企画展「沖縄戦後の復興 Part 2」私たちはこのようにして立ち上がった」展を謹んで学童たちに捧げ、ご冥福を祈る。

〈琉球大学名誉教授〉

平成十八年度慰霊祭がしめやかにとりのこなわれました。

対馬丸慰霊祭が、今年も八月十二日小桜の塔においてしめやかに執り行われました。

年々父母等の遺族が少なくなる中、対馬丸記念館が遺族の抛り

所となり、兄弟・従兄弟などの遺族が参列するなど、新しい世代での供養が定着し、今年の参列者数は三百名余りとなりました。



犠牲者に黙祷を捧げ、護国寺名幸住職の読経のあと、高良会長が弔辞を上げ、犠牲者に平和を誓いました。一般焼香のあと、対馬丸記念館において若狭小学校六年生による平和の群読と合唱が奉納されました。対馬丸が撃沈された午後十時十二分には屋上で有志による追悼会が催されました。



故橋本龍太郎先生のご冥福をお祈りいたします

中央政界で、最も対馬丸遺族会に理解を示して頂いておりました、橋本龍太郎元首相が七月二日にお亡くなりになりました。

改めて先生へ哀悼の意を込め、昨年小桜の塔参拝の写真掲載させて頂きますとともに、橋本先生のご冥福をお祈りいたします。

併せて稲嶺恵一沖縄県知事の追悼談話を七月二日付け琉球新報紙面より転載させていただきました。



稲嶺知事談話

支えを失った

突然の訃報に接し、誠に痛惜の極みである。沖繩をこよなく愛された橋本元首相の急逝は、大きな支えを失ったような悲しみだ。首相在任中、沖繩の基地問題や沖繩振興に対する政策決定に深くかわかれ、沖繩

問題を政府の重要課題として取り上げ、その解決にあたられた。「誠、初心不可忘」を実践された、まさに信念の政治家だった。県民は橋本元首相の功績を永く記憶にとどめたい。冥福をお祈りしたい。

ストレス解消について

第四回 対馬丸記念会 健康講演会
平成十八年五月二十一日、対馬丸記念館企画展示室において、沖繩女子短期大学教授の福地孝先生による健康講演会が行われました。「眠りが浅い」「いつも気分が憂うつ」「体が重い」などストレスサインの見つけ方や対処法など、日頃気になりながらもなかなか解らないストレスへの解決策を聞くことが出来、とても有意義な講演会でした。



平成18年度 財団法人対馬丸記念会 対馬丸記念館ボランティア募集中

対馬丸記念館では、館内及び県内外の教育・行政機関等において平和に関する「語り部活動」を行うことができるボランティアを募集しています。応募者には無料で所定の講座を受講していただき、全講座修了者に認定証を授与、「対馬丸記念館ボランティア友の会」として活動していただきます。

■申込み切
平成十九年三月三十一日

■募集人員
若干名

■募集対象

沖繩本島在住者で当該講座の所定の課程を受講し、かつ、終了後は「語り部活動」を行うことができる者。

■講座実施期間

申し込み日から6ヶ月以内

■講座内容

「語り部活動」の現場視察や「対馬丸事件」に関する学習、講演用パソコン活用講座など。

■講座開催場所

対馬丸記念館会議室

■その他

お申し込みに関するお問い合わせや講座内容など、詳細は対馬丸記念館へお問い合わせください。詳しい資料をお送りいたします。